

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.18 ミツ沢公園

ミツ沢公園（神奈川県横浜市）には、複数のセメント彫刻が残されている。本稿では、1955（昭和30）年に制作された2点の作品を紹介しながら、戦後の野外彫刻の設置場所や目的について考えてみたい。

最初の作品は、井上信道（いのうえ・のぶみち、1909－2008）による《天かける若人》だ（図1）。エネルギーに満ち溢れた躍動的な男女の姿が生き生きと表現されている。本作は1955（昭和30）年の第10回国民体育大会（夏季／秋季大会）、いわゆる神奈川県体を記念して制作され、平沼記念体育館の前の三角形の土地に置かれている。

もう一点の作品がテニスコート脇にある。中川為延（なかがわ・ためのお、1904－1967）による《シャフト》は、もともと1955年の第9回二紀展への出品後に横浜駅東口に設置された。それがいつかの時期に、ミツ沢公園に移設されたものである（図2）。

ここから戦後の野外彫刻の設置場所や目的について考えよう。美術史研究においては、1950年代から1960年代にかけて、空前の野外彫刻設置ブームが起こり、1961（昭和36）年の宇部市で始まった第1回宇部市野外彫刻展を皮切りに、1970年代には都市景観の修景や文化振興などを目的とする計画的な彫刻設置事業が発展的に拡大し、そして1980年代に全国レベルに広がったとされている（竹田直樹「日本における1950年代の彫刻設置事業」、2001年）。その意味では、上記のミツ沢公園のセメント彫刻は、戦後の野外彫刻設置事業の実情を物語る生き証人といえるだろう。

また、野外彫刻の場として公園を考察する研究もある（市川寛也「彫刻の場としての公園に関する一考察—1950年代から1960年代にかけての都市公園・児童公園の事例から—」、2016年）。市川によれば、この時代の設置事業は、①公園を背景として彫刻を設置する事例、②公園の構成要素として彫刻を取り込んでいる事例、の2つに大別されるという。

前者は戦後の街頭美化運動と連動しながら、企業による社会貢献事業として推進されてきた側面が大きく、個人の作品が鑑賞されることに重点が置かれる。この代表例が本連載で何度も言及した小野田セメント株式会社によるセメント彫刻の寄贈事業である。そして国体の開催というやや特殊な事情があるものの、井上の《天かける若人》も前者の事例に該当するといえよう。若い男女が伸びやかに運動する姿を表現したこの作品は、スタジアムや競技場が集まる運動公園に似つかわしいものである。

後者は特定の機能を持った構造物として設置されるがゆえに、使用されることにその本質が置かれる。その好例が公園遊具としてのプレイ・スカルプチャー（遊戯彫刻）である。例

えば、連載第17回で紹介した公園遊具「タコの滑り台」は、児童が触れて遊ぶことを目的としている。既製のブランコやシーソーなどでは遊び方が限定されるのに対し、プレイ・スカルプチャーでは、児童は大人が想像だにしないようなさまざまな遊び方を考案して遊び回る。子供の創造力を育む彫刻作品、それがプレイ・スカルプチャーである。

さらに場に関する考察を進めよう。1950年代から1960年代にかけて、都市公園と並び好んで彫刻が設置された場所が駅前ロータリーだ。中川の《シャフト》は、横浜駅東口に置かれていたものの、その後の新たな都市計画の実施や、道路や駅の拡張工事などの際に「邪魔者」と判断された《シャフト》は、本来の設置場所を失い、三ツ沢公園に移されることでなんとかその命脈をつないだのである。艶やかなプロポーションの3人の女神像が場違いな運動公園に存在するのにはこのような理由があるのだ。野外彫刻作品は人目につきやすいがために、都市機能の変化や社会の趨勢などを情勢などの影響を受けやすい存在なのである。この《シャフト》の場合、横浜駅からの撤去後に廃棄されなかっただけでも幸せだったと考えるべきかもしれない。運悪く廃棄された事例は全国各地に数多くある。

何気なく公園に設置されている彫刻であっても、その制作年代や社会背景などに目を向けると、思いもよらない新たな一面を発見できる。



図1 井上信道《天かける若人》



図2 中川為延《シャフト》